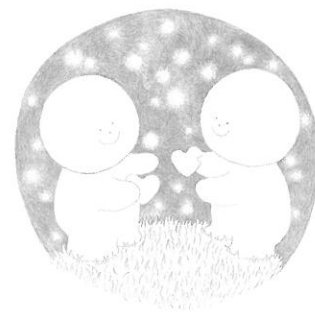


# 自閉スペクトラム症児者の心の理解



## ●仲間は「Universe」だぞ。

自閉スペクトラム症児者は他者の心を理解することが苦手なため、仲間関係をつくるのが難しいといわれることがあります。そこから、自閉スペクトラム症児者に心の理解や対人関係スキルを教えることで、仲間をつくることができるようにさせるといふ考えが生まれます。「うまく関わりたいのに関われない」人のために、そういったことが必要なときはあります。しかしそういったスキルは、相手と「関わりたい」気持ちがお互いに強く育っている前提があってこそ意味をもつものです。仲間は「つくらせる」ものではなく、本人と相手がそういう関係をつくりたいねがいをもって初めて成立します。今年夏の全障研第52回全国大会で、このことを再度教えてくれたすてきな実践(岡田徹也「学校の主人公になる『安心』と『納得』を実践の柱に」)に出会いました。これを通して、仲間づくりとはなんなのか、そのために必要なことを考えてみます。

## ●自分の心を理解してつくる人々の存在

岡田先生は、智樹君を含む特別支援学校の1年生6人を担任します。智樹君は入学式翌日から、給食と下校時に荷物を取りに行く以外は、教室への入室を拒否します。教室から遠く離れた三階廊下の隅に居続け、先生が少しでも「教室、行こうよ」と誘うと興奮し泣き叫びます。一方、彼は好きな「電車」「非常口」の話題になると会話してくれます。その理解の力の高さから当初先生は、そのうち教室に行けると思っていました。ところが予想に反し、その状態は2ヵ月まったく変わりません。先生の心の中には次第に、彼を「会話する理解力があり、今なにをすべきかわかっている、それなのにやろう

## 第10回 多様な感情を共に経験した 歴史をもつ仲間

### 別府 哲 (岐阜大学)

べっぴん さとし/岐阜大学教授。自閉症児・者の発達や指導をライフサイクルを通して研究。著書に『自閉症児者の発達と生活ー共感的自己肯定感を育むために』『障害児の内面世界をさぐる』(以上、全障研出版部)など。現在、全国障害者問題研究会常任全国委員。



としない「わがまま」ととらえ始めたと言われます。実はこの年の6人はみんな落ち着きがなくトラブルが頻発していました。教室から飛び出し、自傷、他傷、窓ガラスを割る…。全員を「教室に集め、怪我や事故なく過ごすこと」が一学期の最大の目標となるほどでした。こういったクラス状態は、子どもを理解する物理的・心理的余裕を大人から奪っていたことは想像に難くありません。そして先生は理解できない苦しさ追い詰められていたのだと思います。

## ●5月の運動会—智樹君の「オケ」直前

教室に入ることできない智樹君は、当然運動会も参加しないと先生は思っていました。しかし彼は当日、すべての種目にとりくみます。そして、その翌日からまた入室拒否に戻ります。

先生は「どうして、智樹君は運動会に参加できたのだろうか」と考えます。担任集団で話すと、彼が入学式、参観日は楽しそうにしていたこと、そしてそこには智樹君のおかあさんがいたという話になります。そして、「智樹君が『わがまま』や『わかっちゃいるけどやらない』のではない。懸命に安心できる存在(それが今はおかあさん・筆者註)を探していた」という仮説にいたります。

先生は、おかあさんだけではなく、自分も安心と納得を与える存在になろうと考えます。そのために、決めるのは智樹君でありそれを応援すること、そのために嘘はつかないといいます。「やらなくて良いよ、だから聞いてね。今、友だちはさ(今日は○○の勉強をね)…」とわかりやすく語りかけ、本人がやらないと決めたことは認めます。嘘をつかない安心感が、彼の中に先生の話を聞く姿勢をつくります。そして先生におんぶしてもらいながら教室の近くへ行くことが増え、二期には自分の教室のロッカーが彼の居場所になっていきます。